



發刊の言葉

強烈な刺戟、わづらはしき世態、ここからエスケープして、我等は一日二日の旅に出る。原始そのまゝの大風景の真只中に立ち、山の神祕を探ぐり、地の不可思議を見、天の變化に驚き、人間興亡の跡を低徊し、久遠の眞理を啓示する、時こそ、我等は、はじめて現實の世界から解放されたる歡喜と、生の貴さを感ずるのではなからうか。

昔から旅は道づれといふ。旅こそよき道伴によつて愉快さは増す。若し適當なる案内があるなら、その旅はどんなにか楽しく、又有益なものとなれやう。私は久しい以前から、さうしたガイドを作つて見度いと考へ、いざ着手して見たもの、凡べてが思ふやうに進まず、でも漸く、このやうな小ガイドとなつて生れ出た。今、これを世に送るに當り、これが旅を楽しむ人々に忠實なガイドであつてくれるならば、實に幸なことである。

由來旅案内には道中記、名所圖繪があつたが、今日も尙ほその範圍を出ず、餘りに誇張的で稍々架空に走るものが多い。少くとも、もし科學的であつてよい。旅を楽しむ者の要求も、ここへ來てゐると考へたので、(1)地形の絶對正確なるを必要とするため、測量部五萬分一地形圖を基礎とし、特に(2)地質構造を示して地形の由來を徹底的に説明し、(3)登山路、小屋場、澤の名等は詳細に掲げ、登山、ハイキング、キャンプに便し、(4)史蹟名勝天然紀念物、口碑傳説を掲げて旅の趣味を豊かにし、(5)讀圖によきやう、精巧なる銅版彫刻となし、製版入念、七度刷、色彩を爽快にした。又(6)携帶に便なるやう小型にて現地繙讀に好適する等、苦心した點は特に言ひ添へてよいと思ふ。

昭和八年初夏

編者識す

K295.4  
135

谷とその温泉境

五萬分一地形圖八海山圖幅、丹後山一北の隆起部約一八四〇米にある。本邦木暮氏が水源を溯行してこゝに登山した。大水上山はスズメの密生したに過ぎないが、四邊は山岳重疊し、極觀を呈してゐる。即ち兎岳近く聳え、中ノ岳、駒岳、八海山あり、東には國山等の外、燧岳、會津駒岳等が偉容を流が大水上山を辭するや忽ち急瀾とな途に魚止瀧、重ね瀧等約十の瀧がか、より越後澤まではV字形の峽谷を成しクイの岩壁に水は岩を嘯んで狂奔す流、水長澤の出合まで大岩壁の廊下がし、その中央にシツケイガマワシの大より寶川を合するまでは普通に見るV峽谷には寶川及湯ノ小屋の温泉がある。峠に發し、V字谷の急流をなして湯檜に合する。清水越は略この谷合に沿ひ、を経て、一四四八米の峠に達してゐる。から西に急な坂を登つて蓬峠から土檜檜會合流以下の溪谷は段丘を切下げてを成してゐる。その著しいものは湯檜神、湯原附近の水上峽及び諏訪峽であ車の窓からもよく見られる。

可なりの絶壁を成してゐる。地形圖を見ては全部露岩となつてゐるやうに考へられるが實際は草や藪があつて、上部では美しい花畑ともなつてゐる。  
〔登路〕 上州側と越後側とにあり、前者には谷川口と湯檜會口とある。(谷川口) 早朝水上驛又は湯檜會驛を立つか、或は谷川温泉宿を立つて、谷川の入口にある淺間神社の右手から直ちに急な尾根を登る。谷川岳頂上までは八軒で、普通五時間を要する。最初の三軒程は尾根を上るのであるが處々に五、六米の下り坂がある。數回上下を繰返す間に、千四百四十米附近にて、右手に入り込んだ澤の頭部で、三十米程下つて澤を越し、又急な上りとなり、熊笹の茂つてゐる道を進むと天神峠へ出る。(こゝまでに三時間を要する)こゝにて湯檜會から高倉山の尾根傳ひに登る道と合する。天神峠から谷川岳へは又尾根傳ひであるが、左は谷川を隔て、阿能川岳の絶壁と谷川上流のオデカ澤の谷を隔て、一直線に、土合の上の湯檜會川谷に突當つてゐるのが見られる。道にはネズコヤシヤクナグが密生し、や、歩き悪いが、間もなく熊笹も減じ岩肌の露れた頂上近くになり、いつした草原帯となる。こゝにはナンキンゴザクラ、イワイテウ、チングルマ、ムシトリスマ、ワタスゲ等の高山植物が頗る多い。露岩の上を歩くこと、暫くにて頂上の三角點に着く。それから北に尾根傳ひに偃松、熊笹、ドウダン等の間を進むこと三十分にて、一九六〇米圏の谷川富士に達する。こゝに小洞淺間社がある。尙ほ五百米も進むと(約一時間)

湯檜會(湯殿山、高倉山、天神峠を経て五時間) 谷川岳、或は土合(西黒澤を経て四時間) 谷川岳(二時間半) 越後富士(一時間半) 萬太郎山(五時間) 土檜 故にこの縦走は一泊を要する。露營地としては越後富士(獨立標高一八七八米)西方鞍部の上州側が適當である。  
谷川岳、三國山の縦走 大略の所要時間を擧ぐれば 湯檜會(五時間) 谷川岳(一時間) 越後富士(一時間半) 萬太郎山(一時間二十分) 毛度澤乗越(一時間半) 惠比須大黒ノ頭(一時間半) 仙ノ倉山(一時間) 平標山(二時間) 大源太山(一時間半) 三國山(三十分) 三國山(二時間) 法師 この縦走には二泊の露營が必要とされてゐる。その地點として第一日が越後富士の鞍部とすれば第二日は平標山か大源太山附近がよい。何れも露營地が得られる。  
湯原、法師間のハイキング 湯原温泉から阿能川の谷に沿ふて上り、佛岩峠にて佛岩の巻と見、新日...





高橋の南一軒、利根川の右岸、段丘上  
根温泉の對岸にあり、橋を通じてゐる。  
上驛の南一軒、利根川の右岸、段丘上  
地を占め、水上橋上の眺望佳。泉質は  
に効く。「旅館」古屋、藤屋、菊富士。  
水上温泉ともいひ、湯原と水上橋を以  
類泉でカルシウムを含有し、胃腸病、  
チヌに効く。「旅館」水上館。「附近名  
訪峽、銚子橋等の勝地がある。諏訪峽  
された峽谷で、川床の岩盤に更に狭い  
その兩側の岩面には多くの甌穴があ  
間つき、兩絶壁には瀾垂樹が密生し、  
しい。銚子橋は峽の最南にあり、最も  
てゐる。天神山には菅原神社を祀り、  
は深淵渦巻き、對岸に山香園といふが  
湯原温泉の北西に大原スキー場、西  
一、少しく隔れて西南に大原スキー  
に適する。  
上驛より徒歩二軒半、谷川嶽の南麓に  
川の溪間に湧出し、鹽類泉、胃腸病、  
「旅館」谷川館、金盛館。「附近名勝」  
、阿能川岳の登山口で、最近谷川のオ

一ノ倉岳の一九七四米の三角點に着く。途中右側に凄  
壯なる一ノ倉澤の頭の斷崖が口を明けてゐるのが見ら  
れる。一ノ倉には一等三角點があつて、眺望雄大であ  
る。尚ほ西方に半軒ばかり切開を進むこと一時間にて  
茂倉岳に達する。頂上は笹の密生した平凡な小隆起で  
ある。「湯檜會口」湯檜會温泉の向側、湯澤の谷から  
直ぐ左に森林の間を上つて湯殿山の上に出る。北東の  
高倉山まで切開きも出来てゐて、樂な尾根上りであ  
る。それより天神峠まで一度上下する處があつて、  
谷川口からの登路と合する。「土合口」湯檜會からや  
、開いた谷合の平坦な道を北東に進むこと四軒にて土  
合に出る。トンネル開穿のとき出した岩塊が累々と一  
面に堆積した間を過ぎ、東洋第一のトンネルの入口を  
見て、西黒澤出合の下に架る土合橋の上に出る。右方  
に山の家がある。橋を渡つて段丘の上に出る處に「右  
蓬峠、清水越道、左谷川岳、茂倉岳道」の標柱がある。  
西黒澤に沿つて上る。谷底は花崗岩質だから稍々白つ  
ぽい色である。餘り樹木もなく、水も少いから上り易  
い。千米の等高線附近から、右方の水のない澤を谷川  
岳の頂上目にかけて、積石等を目當てに、岩石累々たる  
間を行くのである。併し前二者に比して短距離である  
ため、非常に時間が節約される。「土樽口」汽車を越

の出合に出で、少しく上つて川古温泉に至る。川古温  
泉から大白澤に沿つて小徑を上つて三國街道に出で、  
大般若塚、戌辰戦跡など訪ねて九十九廻を一氣に法師  
温泉に下る。全行程十六軒、一日の山旅として變化が  
あつて面白い。  
▲奥利根の地形、地質其の他見學の要項▼  
一、三國山脈を構成する岩石は深成岩類である。  
二、清水トンネルは長さに於て東洋一であるのみな  
らずその兩側に於てはループ軌道を設けて高度  
を上げ、茂倉岳を貫通する。  
三、利根川溪谷には處々に温泉が湧出してゐる。  
四、利根川上流は本支流とも二、三段又は四段の段  
丘が發達し、更に段丘を削剝する處に多く峽流  
が出来てゐる。  
五、清水トンネルの開鑿によつて上越線が全通し、  
この山間にも少なからぬ影響を與へた。  
六、この地域は本邦脊梁山脈なる故、冬季積雪多く、  
好個のスキー場となつてゐる。  
七、瀾葉樹、針葉樹の林相美しく、本地域の風景を  
豊かにしてゐる。  
八、清水越、三國峠等の越後街道には史蹟傳説多く  
この地方の人文景觀を豊富にしてゐる。

新刊十六圖の圖名とその縮尺

日	光	六萬分一	妙義・碓氷	三萬分一
奥多	摩	五萬分一	箱根	二萬五十分一
鹽原	須	四萬分一	筑波	二萬分一
那須	父	十萬分一	水名	五萬分一
奥秩	山	七萬分一	榛名	五萬分一
赤城	山	七萬分一	奥利根	七萬五千分一
富士	山	十二萬分一	高尾	三萬分一
上信國境	境	七萬分一	鎌倉江ノ島	二萬分一
尾瀨	沼	七萬分一	昇仙峽	三萬分一
武甲	山	四萬分一	三國山脈	三萬分一
大島	山	二萬分一	清澄・鹿野山	六萬分一
大嶽	山	三萬分一		

昭和八年四月二十九日印刷  
昭和八年五月三日發行  
(定) 價 金 拾 錢  
(送) 料 貳 錢

著作兼發行者 網島定治  
東京市杉並區天沼二丁目四百八拾壹番地

製圖・彫刻者 小川彦平  
東京市小石川區高田老松町二十四番地

印刷所 井口印刷合名會社  
東京市小石川區西江戸川町拾番地

發行所 地人社  
東京市京橋區銀座西七丁目五番地



群馬県立図書館



0875503-5

東京市神田區表神保町二番地  
發賣所 東都書籍株式會社

電話神區(四)二七一二番  
一〇九二九番  
振替口座東京九三九〇番